



自然・植物との出会い

木岡 昭子

長く厳しかった冬のためか、桜の蕾もまだ固く、春の色彩が待たれる四月の始め、園庭に見慣れぬ花が目についた。小さな、薄黄色の花を房状にたくさんつけた、枝の細い低木である。

四月から幼稚園での生活が二年目の私には、昨年を記憶を呼び起こしても、新しい環境での生活に対する強い緊張だけが甦るばかりで、庭の木々や草花等の印象は薄い。おそらくは心にゆとりがなかったのである。

仕事の合い間に、ぼんやりと、その可憐な花をたわわにつけた木をながめ

ながら、数日たったある日、私は、植物図鑑で調べてみようと思いたった。

自然、とりわけ植物の持つ力は不思議である。四季の変化という恵まれた条件と共に微妙に姿を変えていく植物は見る者に様々の心情を起こさせる。固い地面を割って秘かにはびこる雑草、裸だった枝に幾つもの芽がふくらんでいるのを見つけると、重い冬の装いに包まれた身が、心なしか軽く感じられる。また、そういった春の足音に気づかず、ある日突然の如く、視界が彩やかに色どられるのもすばらしく、体の内側から力が沸いてくる。

そういった自然の与えてくれる力とは別に、植物たちとの豊かな出会いの場として、私は植物図鑑を手にすることがしばしばある。

植物図鑑を買ったのは、一年ほど前のことである。暇をみつけて家の周辺を散索したり、山や野を歩いたりしていろいろな植物と出会う。そのためにと思ったのだ

が、手にして思うのは、知識を得るといふ本来の辞書の性質をぬきにしても、植物図鑑は一冊の本としての魅力を十分に持っている。花壇(庭)、野原、山林、高山等に分けて、四季折々の様々な草花、木々が紹介される。色彩をふんだんに使った挿絵や写真が植物の姿を明確に伝える。どんな稀な植物でも、まわりの情景を思い描いていると、その植物のたたく様子が目には浮かんでくる。図鑑の種類も様々で、子どもむけのもの、持ち歩くのに便利なもの、学術的なもの等、どれを手にしてもそれぞれの楽しみが得られることも特色のひとつである。

子どもと共に日々を重ねると、自然と共存する人間の姿に気づく。

朝、登園の途中に見つけたタンポポを小さい手に握りしめ、茎はくしゃくしゃになっていても、それを誇らしげに差し出す子ども。園庭の隅に植えられているヒメリンゴの木に登り、まだ実の青いうちからたくさんポケットにつめ込み、「水につけると赤くなるんだよ。」と何度

も何度も実験を繰り返す子ども。オナモミの実を集めて、こっそり友だちや担任の背中につけて、「やった！」という気持ちに目を輝かせる子ども。子どもと自然のおりなす世界に身を置く保育者もまた、自然によって豊かに育てられる心を持っているべきだと思ふ。

私にとって自然・植物との出会いは、園生活を通して、子どもと共にそれとかわり、あるいは、自然の懷に抱かれ、様々な現象を体験し、さらに、植物図鑑によって、私自身の心の中の自然や植物への思いを育てることを意味する。まだ図鑑の楽しみ方は浅いが、図鑑を得て気づいたのは、散りゆく花を惜しむと同時に、次にどんな姿を見せてくれるか、胸をとぎめかせながら待つようになつたことである。そして、季節の変化、植物の变化する姿には、少しずつ成長していく子どもたちの顔が重なり、出会いによって生まれた自然や植物に対する思いが重なってゆくのである。

四月の始め、園庭に見つけた花はトサミズキだった。花が散り、四月の末には、かわいらしい若葉が姿を現わ

した。葉を見て再び植物図鑑を開いた。夏、秋、冬と、この木がどう変化していくか、とても楽しみである。

(東京・大和郷幼稚園)

参考図書

「植物」ポケット版小学館の原色図鑑(1) 本田正次・牧野晩成共著(小学館)

季節別・場所別「植物図鑑」 松田修著(社会思想社)

「原色牧野植物大図鑑」 牧野富太郎著、本田正次編集(北隆館)